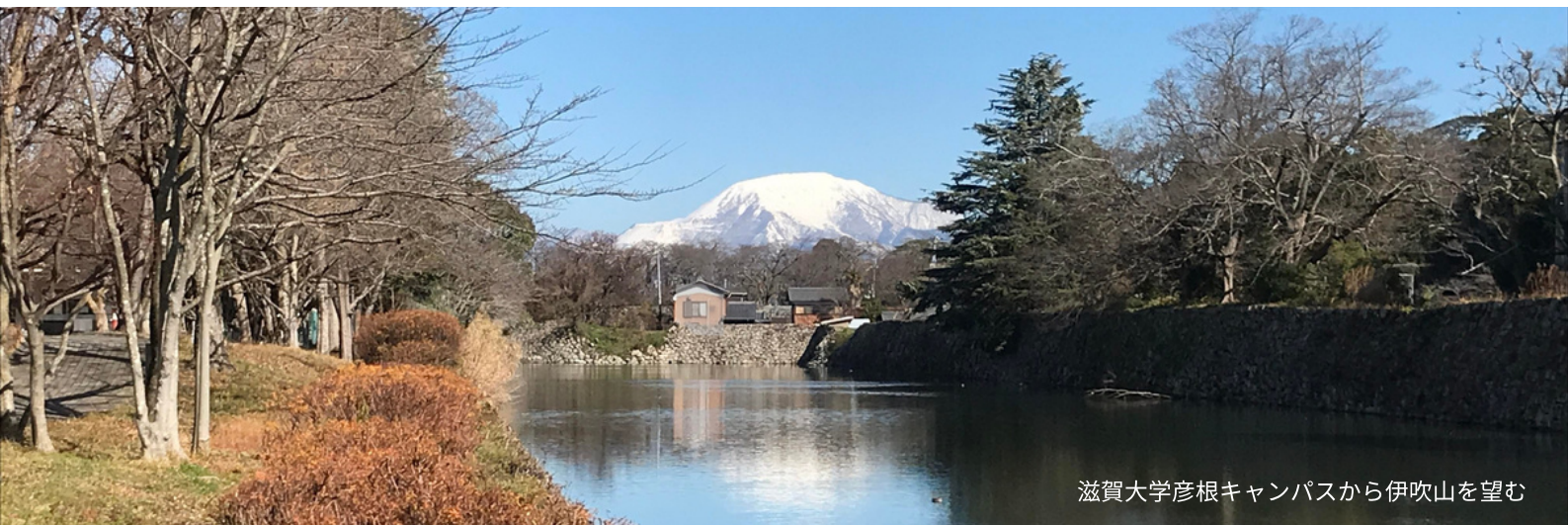




きらっと彦根

彦根の魅力★再発見



滋賀大学彦根キャンパスから伊吹山を望む

新年あけまして おめでとうございます

彦根景観フォーラム初代理事長を務めた山崎です。大変ご無沙汰しております。復刊「きらっと彦根」新年号の巻頭を飾るという栄誉を戴き、筆をとりました。

以前、「私の好きな場所」というエッセーを書きました。「私にはそこに近づく心揺れる場所が二ヶ所ある。一つは鎌倉の海近くの家内の墓、他の一つは彦根城とその石垣だ。・・・初出勤時、吹雪に曝されながらも毅然として、孤高の姿だった。・・・以来10年間、石垣と城を見上げ、その都度背筋を伸ばして襟を正す、これが習性になった。・・・2013年3月をもって退職する。襟を正したい時は、城と石垣に逢いに彦根にいく。・・・」

その時から10年近くの間、三回逢いに行きました。同時期、皆様はこれまで取り組んで来たことをカタチにされました。

皆で買取運動をした足軽辻番所は、公的資金で解体修理が施され、地元組織による管理運営がなされています。文化財指定の足軽組屋敷も徐々に増え、保存・活用が進んでいます。

街の駅「寺子屋力石」の活動から始まった脇街道筋の保存・活用運動は、重要伝統的建造物群保存地区指定に結果しました。

所有者から寄贈された庄屋屋敷は有形文化財として登録され、里の宿「一圓屋敷」として経営されています。

今私は鎌倉で「趣味の音楽」と「地域デザインの研究と実践」を行っています。その研究仲間から「先進事例として彦根を視察したい」という要望があり、足軽組屋敷公開日に訪問しました。「旧彦根藩足軽組屋敷バーチャル資料館」の設立寄付に対する返礼品の受け取りも兼ねていました。



上述三つの事業を視察しました。街を歩いていると、あちこちで「あれ、山崎先生！」と声をかけていただきました。「大学を離れてずいぶん経つのに」と驚くと同時に、嬉しくもありました。これからは襟を正したい時だけでなく、街の皆様に逢える喜びも含めて、彦根に伺おうと思います。

宿泊した里の宿「一圓屋敷」には、同行者全員が感嘆の声を上げました。堅牢な棟立、繊細な仕事の調度、リフォームされた水回りや空調、重厚な表戸と自動施錠などに、安全で快適な滞在環境を感じ取ったのです。また、座敷や居間、寝室を自由に使える解放感も格別で、野鳥の森散策・朝採れ野菜満載の朝食にも魅せられました。

最後に同行した人の感想を記します。フォーラム関係者の方から出た「この街にこんな価値があるとは気づかなかった」、「足軽組屋敷や寺子屋なんてただ古いだけの家だと思っていた」という言葉。地域の再生には「余所者」が必要だといいますが、外からの声に耳を傾け、異質な人でも受け入れる、そのような柔らかな心が地域にあることも必要だと感じた旅となりました。

上述三つの地域はカタチが整いました。これから年輪を重ねる毎に、高みに向け発達し続けるでしょう。それを見続け寄り添うべくまた伺います。共に生涯発達したいと念じています。（彦根景観フォーラム名誉理事 山崎一真）

足軽組屋敷が残る

芹橋らしいまち並みデザインガイドをつくる

昨年12月より、「足軽組屋敷が残る 芹橋らしいまち並みデザインガイドづくり」の研究会が始まりました。第1回は、濱崎理事長によるレクチャー「まちの成り立ちの歴史や伝統的な建物の特徴を学ぶ」でした。若手の方や新しい参加者も来られ、活発な意見交換ができました。

彦根景観フォーラムでは、足軽組屋敷が残る芹橋二丁目地区において、住民の皆さんと「文化遺産を活かしたまちづくり」に取り組んできました。2017年に「芹橋二丁目 まちづくり憲章」が策定され、歴史的な文化遺産を活かしつつ安心して暮らせる、まちづくりの目標が定められました。その後、防災の取り組みや、コミュニティ活動、空き家に移住者を呼び込む取り組みなど、自治会を中心に積極的に行われ、その成果も現れてきました。

しかしその間も、老朽化した足軽組屋敷や風情のある建物が壊されていき、まちの姿もさらに変貌しつつあります。まちが時代と共に遷り変っていくのは当然のことではありますが、何の思想も無いまま無秩序に変わっていくのは避ける必要があります。昔は手に入る材料や技術が限られていたため、おのずとまち並みが整ってきました。ところが、現代は様々な材料や新しい技術が使えるため、ともすればバラバラなまち並みになってしまいがちです。

「まちづくり憲章」の中にも書かれている「ちょっといい感じのまち」とはどんなものなのか？ 住民の皆さんが気持ちよく暮らすために共有でき、また来訪者にも魅力的で住みたくなるまち並みとはどんなものなのか？ 5回の研究会を通して、住民の皆さんと考えていきたいと思います。

何らかの規制をかける訳でもなく、行政から補助金が出る訳でもない、とても難しいことに挑戦しようとしています。しかし、住まう当事者の意識の高まりこそ、どんな補助金にも勝るものだと思います。

(笠原啓史)



第1回研究会
「まちの成り立ちの歴史や伝統的な建物の特徴を学ぶ」

さとの宿だより

一圓空太夫さんのこと

一圓屋敷は平成20年に一圓家12代の方から譲渡を受け、NPO法人彦根景観フォーラムの持ちものになりました。建物は安政4年1月に普請が始まり安政7年に完成したそうです。

165年前にこの屋敷を建てたのは、8代一圓空太夫（いちえんもくだゆう）さん。ある日、一圓集落の中にあったお屋敷が火事となり全焼、集落の端の竹藪だったこの場所に移住をしたそうです。記録に残る8代空太夫の「庄屋の初見」「井伊直弼の領内巡見」など、誉れ高き出来事と失敗な出来事が交差する人生だったのかなと、ときどき思いを馳せていました。

昨年末、文化財の調査で敦賀市立博物館の学芸員加藤敦子さんが屋敷を尋ねて下さいました。明治に活躍した日本画家、内海吉堂（うつみきちどう）の絵の展覧会を数年前に開催したところ、観に来られた方が内海吉堂画の肖像画を持っておられて、一圓有秀と共箱に書いてあるが誰だろうと相談されたとのことでした。

その画のお顔は68歳の一圓空太夫（有秀）さんでした。竹藪のなかからお顔が出ていて、ちょっと笑ってしまいました。優しそうな人でよかったと思いました。

(江竜美子)



多賀さとの宿 一圓屋敷

<https://www.ichienyashiki.jp/>

〒522-0317 滋賀県犬上郡多賀町一円149

Tel. 050-3319-1050 info@ichienyashiki.jp